

地域に根付いた居場所づくりを目指して

— 松江市城北地区における夕食提供サービス（オレンジキッチン）の取り組みから —

松江市社会福祉協議会地域福祉課 三上 貴大

松江市の人口は約20万人、高齢化率約29%である。だが地区ごとに比較すると、高齢化率は40%を超えるところと、17%程度のところがあるなど大きな差がある。高齢者の総合相談窓口である地域包括支援センターはエリア毎（6カ所＋2カ所のサテライト）に設置されている。筆者が担当する「中央エリア」の圏域には、県庁や市役所、総合病院や金融機関なども多くあり、生活資源も多い。一方で、マンションが多く建設されるなど確実にコミュニティの変容がみられる地域でもある。

地域の福祉活動を推進する要である地区社会福祉協議会（以下、「地区社協」という。）の事務局は、公民館に設置されている。地域の見守り活動を行う福祉推進員は1600名、なごやか寄り合いという高齢者を中心とするサロン活動は市内約400カ所で行われている。

松江市社会福祉協議会（以下、「本会」という。）では、「高齢者の暮らし困ったこんな時お知恵拝借シート」を用いたワークショップを各地区社協単位で実施してきた。このシートでは高齢者の困りごとの代表例に対し、今ある地域の社会資源を知ることだけではなく、将来像について意見交換するものとなっており、多くの意見が挙げられた。

こうしたワークショップのほか、地域の様々なデータを1つのシートに落とし込んだ「地域の課題見立てと手立て検討シート」を各地区で作成している。様々な関係者と一緒に、地域の状況を「見える化」している。専門職としては、多面的な地域アセスメントへとつなげていくという狙いがある。

城北地区においても、このようなワークショップや地域の状況の「見える化」の取り組みを通じて、「地域の人と気軽に交流できる機会や場所を求める意見」が挙げられた。また、高齢化の進展や一世帯あたりの世帯員の減少などから、「孤立や孤食」といった問題が顕在化しつつあるという見立てを行った。それらを基に、「ともに支える城北の会」を立ち上げ、①ニーズ調査、②城北担い手育成、③オレンジキッチン（夕食提供サービス）に取り組むことになった。取り組みの最終到達目標は、オレンジキッチンを中心とする生活支援サービスの拠点（つながりの場）形成、また「人と人とのつながりの再構築・修復」の場の創出である。

これらの取り組みを城北地区に根付いたものにするため、部会制を設け、できるだけ多くの地域住民に「活動者」として運営に関わってもらった。しかし、城北地区においても「既存の福祉活動を維持していくことで精一杯」という状況であり、新しい取り組みに対しては負担感が大きいという声も挙がっていた。そのようなときに地域貢献の取り組みを進めていた「社会福祉法人みずうみ」が、利用者の送迎や調理を担当することになり、オレンジキッチンの実現性が高くなった。

古民家を改修したオレンジハウスで月に1回開催されるオレンジキッチンには、毎回10～15名（ほとんどが独居高齢者）が集う。「おいしい、温かいご飯が食べられることが楽しみ」「家では一人で食べるけど、ここでは、いろんな人とお話ししながら、食事ができて楽しい」「月に1回が待ち遠しい」といった声がある。

また、利用者の中には地域包括支援センターや本会の「個別相談対象者」もある。現在では、オレンジキッチンを通じて個別支援を行っている。実態把握が難しい利用者には、オレンジキッチンを通じて接触が可能となるし、県外出身などで孤立傾向である対象者にとっては、地域住民とのつながりを構築できる場となっている。いわば、住民を支える貴重な地域の資源となりつつある。

城北地区での取り組みを通じて、筆者は、地域アセスメントの重要性を認識した。まず、地域住民の参加のためには、「共感」が重要である。そこでは、地域の活動者の過度の負担を軽減することも、ソーシャルワーカーとして求められる。さらに、福祉専門職であれば、アセスメントの上、不足している資源を開発することも必要となる（困難さも含むが）。同時に、ハードの資源だけではなく、人的資源との出会いも大切となる（様々な団体や人との連携・ネットワーク化の必要性の再確認）。オレンジキッチンの取り組みを通じて、個別支援（その人の“生活”を支える）と地域支援の両視点（個別支援と地域支援の融合）を持つことの重要性に気付かされた。

【キーワード：つながりの場、孤立・孤食、地域アセスメント、個別支援と地域支援の融合、ネットワーク】